

第55回インナーゼミナール大会研究計画書

ゼミ名	宮川ゼミ	チーム名	宮川チルドレン
タイトル	自尊心が高いのはいいこと？～努力, チャレンジ精神, 他責思考の相関分析～		
テーマ群	a) 理論・情報 g) その他		
メンバー	国岡春希, 岡野将太, 中井俊太, 松永虎太郎, 齋賀康成, 瀬戸川春実, 大内美実		
研究計画内容	【研究背景】 一般的に自尊心が高いことが良いとされているが、経済学的にみると自信が高いうえに努力を怠たり、人のせいにすることや感情や認知バイアスが意思決定に大きく影響することが明らかになっている。自尊心はその代表的な心理的要因の一つであり、努力や挑戦、リスク選好が自己評価にどのような影響を与えるかは重要なテーマである。高い自尊心は挑戦への意欲や成功期待を高める一方で、過信を引き起こし、非合理的な意思決定や失敗時の他責化を促す可能性もある。 【研究内容】 本研究では、自尊心が高いほうがいいのか大学生を対象にアンケートを実施し、自尊心の高低を被説明変数とし、リスク選好、努力持続行動、挑戦意欲などを説明変数としてそれぞれの関係を重回帰分析を用いて分析する。どのような要因が自尊心に影響を与えるのか、自尊心が高いこと、低いことによって挑戦心や努力、他責思考に対してどのような影響があるのか等を探求する。また、一般的に言われている自尊心が高い人は、自分以外に原因があると考え、努力をしないとといった関係の有無の検証や、自分ができるという自己効力感を高めることで行動をどのように変化させることができるのかを明らかにしたい。 【期待される効果】 この研究では、自尊心を高めることがいいという仮説の下で、それを高めるためにはどういった被説明変数が重要であるのかなどを検証する。また、自尊心を高めるための具体的な提案を行う。「自尊心は高ければ良い」という考えを見直すきっかけとなる。自尊心が高すぎれば他者への責任転嫁や反省の欠如を招き、低すぎれば挑戦を諦めてしまう恐れがある。そこで本研究は、努力や挑戦を支える「ちょうどいい自尊心」の役割を明らかにし、学校教育や人材育成において「自信を持ちながらも現実を見られる人」を育てるヒントを示す。 【参考文献】 坂野雄二, 東條光彦(1986年)「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」『行動療法研究12巻』 内田智宏・上埜高志(2010)「Rosenberg自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討」『東北大学大学院教育学研究科研究年報,第58集,第2号』		

--	--

研究計画書